



実践団体・プラン基本情報

実践団体の基本情報

記入日	西暦 2024 年 1 月 18 日 (2023 年度のチャレンジプラン)
プラン名	橋梁流失に関わる GIS オープンデータから始める気候変動適応「X-Bridge」
実践団体名	株式会社オシントック X-Bridge プロジェクトグループ
代表者名	小田真人
電話番号	080-4392-0684
メールアドレス	x-bridge@osintech.net
実践団体の説明	神戸情報大学院大学の研究チームとして発足、各分野の社会人有志が集まり、中部大学国際 GIS センターや BCorp である(株)オシントックの支援を受けつつ非営利で活動を進めてきました。橋梁の専門家、気候変動の研究者、オープンサイエンス、シビックテック、社会起業家等という多種多様なバックグラウンドとスキルを持つメンバーで構成され、専門領域にとらわれない越境的思考で解決策を導く事を旨としています。直面する気候変動への適応のため、ソフト・ハード両面での活動を推進し、積極的に提案・行動する大人の部活的な研究チームです。
所属メンバー	小田真人：世界中の公開情報を収集・分析する専門家 小田一枝：気候変動の専門家 鴨谷知繁：コンクリート橋補修の専門家 布施智行：IT システムエンジニア 西谷友彬：IT 技術に精通した市民活動家 辻 智樹：地理情報システムの専門家
活動の本拠地	兵庫県神戸市
活動開始時期・結成時期	2021 年 8 月
過去の活動履歴・受賞歴	・ 2022 年 2 月 中部大学発表



	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2022年9月 土木学会全国大会 ・ 2022年9月 兵庫県立龍野高校ワークショップ ・ 2023年2月 中部大学発表 ・ 2023年3月 「アーバンデータチャレンジ2022」銀賞 &土木学会インフラデータチャレンジ賞ダブル受賞 ・ 2023年6月 関西学院千里国際高等部ワークショップ ・ 2023年8月 兵庫県立御影高校ワークショップ ・ 2023年9月 土木学会全国大会 ・ 2023年12月 「流域治水と森林」トークカフェ参加
--	--

プランの基本情報

プランでの実践主体	1. 学校・教育関係 4. 地域組織 7. 企業・産業関係 13. 個人
プランの運営側の人数（実数）	約5人
プランの活動地域	<ul style="list-style-type: none"> ・ 兵庫県神戸市 ・ 熊本県人吉市 ・ オンライン（限定公開）
プランの防災教育の対象者	20. 全ての人々
防災教育の対象者の人数（実数）	約55人
プランが対象とする災害	3. 風水害
プランの活動目的	<ul style="list-style-type: none"> 1. 防災意識を高める 3. 防災に関する知識を深める 6. 災害に強い地域をつくる 7. 災害対応能力の育成 8. 防災に役立つ資料・材料づくり
対象者が身につく知識・技能等	<ul style="list-style-type: none"> 2. 気象災害 3. 災害時に発生する課題・影響 5. 起こりうる災害の地図等による可視化
プランの活動形態	2. 講習会・学習会・ワークショップ
プランでの連携先	<ul style="list-style-type: none"> 1. 学校・教育関係 8. 国・地方公共団体 10. 企業・産業関係 16. 個人
実践にかかった金額	100万円未満 円



プランの年間活動記録

	プランの立案と調整	活動準備	実践活動
4月	私立関西学院千里国際高等部ワークショップ		
5月		私立関西学院千里国際高等部ワークショップ	
6月	兵庫県立御影高校ワークショップ		私立関西学院千里国際高等部ワークショップ
7月		兵庫県立御影高校ワークショップ	緑の流域治水スタディツアー参加兼被災地復興状況視察
8月		土木学会全国大会発表	兵庫県立御影高校ワークショップ
9月			土木学会全国大会発表
10月			
11月			
12月		「未来の教室」掲載相談	
1月	講師向けワークショップ		Webサイト/Facebookページ作成 講師用ガイド作成
2月		講師向けワークショップ	
3月			講師向けワークショップ



実践したプランの内容

プラン全体の概要	気候変動に伴う水害の激甚化により、橋梁の流失リスクが増大しています。本活動では、自らの住む街を知り災害に備えるため、GIS オープンデータを活用するワークショップを通じて、市民が水害時流失リスクの高い橋梁を可視化し、防災意識向上ひいては総合的な気候変動適応に貢献します。ワークショップの教材もオープンソース化することでこのような取り組みの実施を促進し、ローカルデータが GIS 上に集約され、研究に活用されていく仕組みの事例化を狙います。
プランの「チャレンジ」の結果	<ul style="list-style-type: none">・ 6/26～27 オンラインワークショップ@私立関西学院千里国際高等部…2 回に分け計 50 名の生徒が参加。感想として「自分も貢献できると気付いて良かった」「与えられたハザードマップを見るだけでなく自分で他のレイヤーとを重ねることで災害意識が上がった」等。・ 8/9 ワークショップ@兵庫県立御影高校…プロジェクト外メンバーが公開済の資料を基に来年度の探究授業のモデルとして実施。参加者計 5 名。感想として「危険な場所と安全な場所が見えてきて、これからのためになりそう」「ハザードマップも全て予測で絶対にこうではないと覚えておきたい」等。資料がオープンソースとして有効と実証。・ 7/15～16 緑の流域治水スタディツアー参加兼被災地復興状況視察…現地で流域治水を学ぶと共に、雨庭の取り組みを実施されている熊本県立南稜高等学校と交流。若者世代の教育を起点に気候変動適応しつつ減災・防災を図りながら市民参加型で学び合いながら進めるまちづくりを目指していく。



	<ul style="list-style-type: none">・ 9/14～15 土木学会全国大会で当取り組みを発表・ ワークショップガイド作成…Web サイト上で取り組みの実績やノウハウを蓄積し共有を図ると共に、新たに取り組む方が参加しやすいよう環境を整備した。・ 講師ガイドの充実…講師用資料に話す内容を全て記載し、主催に当たってのハードルを下げた。・ 主催者向けワークショップの企画…経済産業省「未来の教室」への登録相談をきっかけに、未来の主催者がアクセスしやすいよう企画し 2024/3/5 に実施予定。定期開催によりコミュニティ形成も狙う。・ 中部大学で当取り組みを発表（2024 年 2 月予定）・ 12/16 「流域治水と森林」トークカフェ参加…水害対策と、今後の展開として橋梁流失後の復旧に向けた課題についても検討するため参加。
--	--

実践内容・方法・成果	<ul style="list-style-type: none">・ 徹底的なオープンソース化により再現性を高める<ul style="list-style-type: none">(1)ワークショップ資料の公開(2)講師の説明文章を資料中に記載(3)ワークショップガイド Web サイト作成<ul style="list-style-type: none">①取り組みの内容・目的・経緯を記載②ツールの使用方法について解説③ワークショップ用教材について解説④関連知識を得るための用語集を記載⑤これまでの主な取り組みを記載⑥問合せ先を明記(4)講師向けワークショップを定期開催<ul style="list-style-type: none">直接の対話も重視しながら取り組みの輪を拡大
------------	--



プランにおける工夫：プランを実践する上で、下記について具体的に工夫をしたことはありますか。
該当するものについて具体的な例を挙げながら記入をしてください。

この項目は任意項目であり、全てを埋める必要はありません。当てはまるもののみ記入してください。

<p>1. 【準備段階】<u>運営側の担当者を決める際の工夫</u> 例：役割分担を明確にした</p>	
<p>2. 【準備段階】<u>地域のキーパーソンと連携する際の工夫</u> 例：自治会と連携をした</p>	
<p>3. 【準備段階】<u>運営側を組織化する際の工夫</u> 例：協議会を作った</p>	
<p>4. 【準備段階】<u>対象者や対象地域の範囲を決める際の工夫</u> 例：活動範囲を限定した</p>	
<p>5. 【準備段階】<u>準備時間を確保する際の工夫</u> 例：定例の打ち合わせを設けた</p>	
<p>6. 【準備段階】<u>活動場所を確保する際の工夫</u> 例：公民館などを無料で使用した</p>	
<p>7. 【準備段階】<u>活動資金を確保する際の工夫</u> 例：自治体の助成金に応募した</p>	
<p>8. 【準備段階】<u>知識や情報を収集する際の工夫</u> 例：専門家による勉強会を開いた</p>	
<p>9. 【準備段階】<u>教育・訓練プログラムや教材を作成する際の工夫</u> 例：webサイトを引用した</p>	



<p>10. 【実行段階】 <u>経験豊富なアドバイザーを確保する際の工夫</u> 例：実行委員に助言を求めた</p>	
<p>11. 【実行段階】 <u>地域の理解を得て関係機関と連携する際の工夫</u> 例：行政・自治会等と共催した</p>	
<p>12. 【実行段階】 <u>活動時間を確保する際の工夫</u> 例：総合学習の時間に実施した</p>	
<p>13. 【実行段階】 <u>活動経費をなるべく抑える際の工夫</u> 例：必要物品を消防署から借りた</p>	
<p>14. 【実行段階】 <u>他の実践団体と交流する際の工夫</u> 例：中間報告会でプログラムを紹介してもらい共有した</p>	
<p>15. 【継続段階】 <u>後任者を育成する際の工夫</u> 例：若手を入れた</p>	
<p>16. 【継続段階】 <u>活動で得られた知識・経験を、かたちにまとめる際の工夫</u> 例：引き継ぎ書を作った</p>	<p>前述のオープンソース化（ワークショップ資料の公開、講師用説明文章の明記、ワークショップガイド作成等）を徹底して実施した。</p>
<p>17. 【継続段階】 <u>活動の成果を外部に発信する際の工夫</u> 例：web サイトで発信した</p>	<p>Web サイトと Facebook ページを作成し発信した。</p>
<p>18. 【継続段階】 <u>活動内容を見直す際の工夫</u> 例：振り返りの会を開催した</p>	<p>イベント毎に有識者や参加者の方からいただくフィードバックを全員で確認した。</p>



今後の活動予定・今後の展開	<ul style="list-style-type: none">・経済産業省「未来の教室」への登録…学校現場でより取り組みやすいよう、改めて登録を依頼する。一度登録相談した際には定期的なワークショップを企画化しておらず見送りとなったが、米田先生の助言もいただき講師向けの定期的なワークショップ企画に繋げた。・講師向けワークショップを継続開催していき、主催者の育成とデータの充実化、コミュニティ形成を図る。ワークショップの初回は2024/3/5(火)、世界同時開催のオープンデータの祭典「オープンデータ・デイ」の一環として開催することで、ITを用いた市民活動（シビックテック）をしている方へも裾野を広げる。・GISへの登録内容の拡充…流域治水として注目される雨庭や田んぼダムへも取り組みの拡大を検討していく。ローカルデータの可視化によるオープンサイエンスの実現と、参加者への啓発による地域防災力向上が目的。・竹筋コンクリートの利活用検討…橋梁流失後の課題として、SDGsの観点から復旧に竹筋が使えないか検討する。
---------------	--

この項目は任意項目です。当てはまるものがあれば記入してください。

その他（PRポイントなど）	<ul style="list-style-type: none">・今後の展開が複数方面にピボットしていますが、多様なメンバーが有機的に連携しつつ柔軟に発想を活かし合いながら取り組めていることがこのチームの最大の価値であると思います。
---------------	--